
そして黒木は途方に暮れる

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして黒木は途方に暮れる

【Nコード】

N8568I

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

製薬会社に勤める黒木は、自他共に認める女好き だったが、同僚の秋月の妙な姿を目にして以来、おかしくなった。俺って、俺って 俺って？

「BY YOUR SIDE」への前奏曲的小品。

黒木憲明は、自他ともに認める女好きだ。

さすがに職場では自重して手をだしたりはしないが、学生時分から隣におんなが座るだけで孕ませる、と言われていたぐらい、手はやい。

おまけに、この男には「好み」というものがなかった。

ふつう面食いは面食いなりに、思い返せばどこかに共通項があるはずが、この男にはない。派手美人、ロリ美人、エロ美人……なんでもありだ。

困ったことに、黒木は背が高くて、高学歴、高収入。人当たりもよくて、会話もよどみなく、おまけに顔もいい。モテないわけがないから不自由しなかった。

同期入社の秋月ひかるとは、入社後の3週間の研修期間中に仲良くなった。

グループも同じだったし、どちらも研究所勤務希望、生物化学出身。秋月は、見かけが女の子みたいに華奢で、丸いふちなしメガネが愛嬌のあるかわいい顔をしていた。だから最初、だれもが秋月を軽くみていた。

何をやってても、いつも他人よりワンテンポ遅れていたし、世間知らずだったからだ。

が、実際はそれを裏切るぐらいに専門分野の知識は秀でていた。浮世離れた研究バカという言葉は、まるで秋月のためにあるようなものだった。そのくせ、他人に興味がないわけではなく、むしろいつでも輪のなかにいた。

ミーティングでも、いつも他人の話ばかり聞いていた。たまに、コメントを出したり、アイデアを出すとそれは決まって、他人の手柄にされていた。

その薄らぼんやりにいいかげん苛々して黒木が怒鳴りつけたのが、話すきつかけだった。

黒木は、どちらかと言えば手柄を独り占めしたい、研究者にありがちなタイプだったが、秋月の返答には目からうろこが落ちていた。「だって、研究もチームワークでしょう。研修の最後にだすレポートは、みんなのものだよ。より良くなればいいじゃない」

正直いって、見なおした。

そして運良くおなじ研究所に配属された。以来、三年半……ごく普通の気の合う同僚としてつきあってきた。

それが……なんだか妙な具合になってしまったのだ。

もとはといえば、同居しはじめた甥っ子と喧嘩をしたか何かで家に帰りたがらない秋月を、ひとり住まいのマンションに泊めたのが始まりだった。

夜中、トン……トトン、とベッドが叩かれる小さな音で目が覚めた。

なにごとかと思ってベッドから隣の床に敷いた布団をみたら、秋月がわるい夢でも見ているのか、寝苦しそうに手を振っていた。

その手が、ベッドを叩いていたのだ。

起こしてやったほうが、いいかな、と黒木は思った。

そして、息をのんだ。

カーテン越しの街灯のあかりに浮かぶ秋月の顔は、息をするのを忘れるほどにエロティックだった。かすかに眉根をよせて、半開きのくちびるから浅い、喘ぎを漏らしていた。ときどき、無意識にかその唇を白い歯で噛む。貸してやったパジャマははだけて、男にしては細い首のしろさが目に焼きついた。

その瞬間、黒木の理性ははるか彼方へ吹っ飛んで、ただのケダモノになっていた。

まあ、実際のところは合気道かなにかをやっていた秋月に、急所のこめかみに一発いれられ、そのうえ腹を蹴り飛ばされて未遂に終

わって、どちらにとっても事なきを得た。

その後の秋月は、偉いやつだった。

黒木が、勢いで「俺をおまえの最初の男にしろ」とまで言ったにも関わらず、あっさりと気の迷いで片づけて、普通にふるまっている。

しかし、黒木のほうは、そうはいかなかった。

あれ以来、秋月のことが必要以上に気にかかる。昼飯ときには、つい、ものを咀嚼している口元に目がいく。実験の理論でいきづまったりしてちいさな溜息をつくとき、その吐息にあの喘ぎ声がオーバードラップする。実験結果のつき合わせをしていて、隣に秋月がいると、もう落ち着かない。

こんな経験は、過去いちどもなかった。

それこそ、数えきれないぐらい女を相手にしてきたが、仕事がおろそかになるほど気もそぞろになった事は、一度もなかった。

しかし、いまの黒木ははじめて恋をした少年みたいに、一日じゅう秋月の小柄な姿を追いかけまわさずにはいられない。

そんな自分に、途方に暮れる思いだった。

いったい、自分は どうしてしまったのか。いつものように、出会いを求めてそのテのバーにいつても、まったくその気にならない。むしろ、馬鹿ばかしい。

どれほどの美人を見ても、ときめかないし、欲情しない。

黒木は、二十五歳にして初めて、アイデンティティの危機に陥っていた。

そして……誰とも知れない暴漢に襲われて、黒木は自慢の顔をボロボロにされた。その五日後、やっと研究所に出勤してきた黒木は、なにやら雰囲気の変わった秋月を見て、ドキーン！ と一発心臓を撃ち抜かれていた。

(か、かわいい……)

どこが変わったとは言えないが、秋月はなにやら艶めいて無垢な

色気をかもしだしていた。秋月がやっている事といえば、ひとりコンピュータにむかって研究データをグラフにしているだけなのだが。

「あ、来たんだ……怪我、まだ治ってないみたいだけど」

「あ、ああ」

喉がカラカラに乾いていて、言葉がうまく出てこなかった。

「課長にはもう、会った？ マウスの経過報告書は課長自らやってくれてたから、まだならお礼言つといたほうがいいよ」

「ああ、言いにいく……なあ、秋月」

「なに？」

「おまえ、なんで看病してくれなかったんだよ」

課長命令とかで、わざわざマンションまで様子を見にきたくせに、黒木の顔の事情を訊くなり、謝ってマンションを飛び出して行った。それきり、どんなに待っても戻ってきてくれなかった。

黒木は、待っていたのだ。待って、待って、戻ってくるのを待っていた。

よほど恨めしそうな口調だったらしく、秋月はちょっと下をむいて、済まなさそうに「ごめん」と言っていた。

「い、いいけど……あん時俺まだ、熱があつたんだよ。いてくれたら、嬉しかったのに」

「……ごめん」

ふちなしの丸メガネのむこうから、上目づかいに見上げられ、すぐに伏せた瞳に、くらくらした。思わず、へなへたと手近な椅子に座りこんでしまった。

「だいじょうぶ!？」

椅子を蹴るようにして、秋月がとんでくる。

白衣がたなびいて、天使の羽に見えた。

「無理しないほうがいいよ、顔の腫れもひいてないのに」

どうしよう……。黒木は、これまでの自分がガラガラと音をたてて崩れていくのを、意識した。

おんなの好みが一定していなかったはずだ。
彼がほんとうに好きなのは、男のほうだった。
蔵密にいえば……秋月ひかるだった。

「秋月！」

言うなり、黒木は両手をのばすと、がばっと目の前にある細い腰を抱きしめていた。

「あ……い、痛！」

ちいさく叫んで、腕のなかで秋月が息をつめて身体をかたくした。そうして、ゆるゆると息をはきだす。やっと、力を抜いていた。

「ごめん、黒木……ちよつと、力をぬいてくれる？ この体勢、その、痛いんだ」

（この体勢……？）

たしかに、楽な姿勢とは思えないが、痛いというほど無理な姿勢というわけでもない。秋月の小柄な身体は、黒木の正面からなかば膝に乗るかたちで、片足だけ預けて抱きすくめられている。

「……ちよつと、待て」

黒木の眼が、すわっていた。

「ちよつと待て！ おまえ、どこが痛いんだ！！」

「え、そ、それは……」

もがくように腕のなかから抜け出した秋月の色白の顔は、真っ赤になっていた。

（うわあああ……）

色気がでたはずだ。

（童貞をとびこして、いきなりかよ、おまえ！）

黒木のあたまのなかは、一瞬にして伏字でいっぱいになった。

「なんで……なんで。俺を最初の男にしろって言ったじゃないか！ それを、どこの誰にやっちまったんだよ！ 行きずりか？ そういふ男か？」

黒木が決めてかかると、ぷく、と頬をふくらませて睨んでくる。

「ひどいよ、黒木！ 僕がそんなタイプじゃないって知ってるくせ

に！ 僕は好きな人としかしなないよ！」

とどめの一発だった。

「恋人が……できたのか」

「……うん」

照れくさそうに俯いて、秋月が口元に拳をあてて頷く。

ふらふらと、黒木は立ち上がった。いた。

「俺、このまま帰るわ……」

「あの……大丈夫？」

悲しみいっぱい、黒木はちよつと振り返る。

「そんなわけ、ないだろう……」

初恋と失恋を、器用に一度ですませてしまったショックで、黒木はそれからまた、しばらく研究所を休んでいた。

その後、黒木は不屈の精神で立ち直った。

いまでは彼は、以前の出会い系バーには立ち寄りもしない。彼がいくのは、発展場だ。最初の頃は、怖かったが、もう慣れた。

一度お持ち帰りを経験し、そのあとは自分がお持ち帰りをするようになった。

ここでも、黒木はけっこうモテる。

しかし、いまだに秋月ひかるの影を追ってばかりいた。

彼が本当にしあわせになる日がくるのは、いつのことかは、まだ、わからない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8568i/>

そして黒木は途方に暮れる

2010年10月8日15時26分発行